

關係的述語と実在的關係

—ライプニッツ哲学における個体と個体概念をめぐって—

枝村 祥平

0 序

モナドとは被造物である実体であり、また、個体として被造物の宇宙の基本的単位を構成する。ところで、「モナドには窓がない」(M7) のであれば、それぞれのモナドは独立自足の存在者ではあるが、モナド同士の関係はいかなるものとなるのか。この点について、関係はモナドにとって全く外的なものであるとする説^①と、モナドに対応した個体概念は当該個体と他の個体との関係を關係的述語として含むとする説^②がある。

私は、特にライプニッツが『人間知性新論』で関係を含まない程絶対的で孤立した言葉はないと述べている(NE 2,25,10)ことからすれば、個体概念もまた関係を含むと解釈する後者の説が妥当と考える^③。ところで、後者の説を取ったとして、關係的述語とはどのようなものとして説明されるのであろうか。そもそも個体概念は、我々人間にとっては完全な把握が不可能であるような無限の内容を含む概念であり(DM8)、本来は神が各々の個体を創造するにあたって個体を認識する際の概念である。そして、創造以前に可能的諸事物の本質があるとされており(GVII 303~304)、加えて神は本質の源泉であるとされている(M43)ことから、個体概念は存在することが可能である個体の本質でもあると考えられる。とすれば、仮に關係的述語が、それ自体としては個体における性質を形成しないものであるとすれば、不都合が生じるように思われる。というのも、その場合は、個体概念は、必ずしも個体の内容をなさないようなものを含んでしまうことになり、個体がまさにその個体たりうるための必要十分条件すなわち本質にはなり得ないと考えられるからである。

それゆえ、個体概念をまさに個体の本質たりうるものとして考えるのであれば、關係的述語が、個体を含む実在的關係を指示するものであると考えなくてはならない。

本論は、かかる關係的述語と実在的關係の対応関係を論究することを目指すものである。議論は以下のようにして進められるであろう。まず、議論内容を明確にするために、關係的述語を個体概念にとって内属的なものとして認める代表的論者である、ムニャイの議論を整理して紹介する。彼の解釈は、ライプニッツの議論をコンセプショナリズムとして位置づけるものである。その趣旨は、モナド＝個体的実体が保持するものはその内的性質の

みであるが、モナド同士の關係は、モナドの内的性質に厳然と基づいて形成され認識された概念として、神の知性および我々の知性においてあるという仕方では存在論的身分を有しているというものである。

先回りすると、ムニヤイの解釈は、關係的概念の客観性・普遍性を存在論的な観点から説明しようと試みている点で評価出来るものである。ところが、一方でムニヤイは、個体概念と個体的実体そのものを別個に考え、個体的実体そのものは純粹に内的な性質しか含んでいないとする。しかし、そのような見地に立てば、二つの点でアボリアを抱えてしまうのではないと思われるのである。それは、まず一つには、モナドにおける共可能性の問題をうまく説明出来ないのではないかと、ということである。また、今一つには、關係的概念がいかに実在と照応しているかという点について、不安を抱えてしまうのではないかと、という問題である。普遍的なもの、關係的なものを、神によって認識され形成される概念とのみ考えるのであれば、人間がどのようにしてそうした事柄を認識するのかを説明しにくいのではないかと。つまり、個体概念に關係的述語が含まれていても、個体的実体の内的性質として關係的なものがないのであれば、個体同士の対応關係が神の作為によるものということになり、かかる対応關係は存在論的にみて根拠が薄弱であるという批判を招いてしまうのではないかとと思われる。そうした場合、個体がいかにして關係や普遍を認識するのか。ムニヤイの立場では、神が自ら認識する概念をそれぞれの個体に植え込んだ、という説明に留まるように思われるのである。

1 ムニヤイによるライブニッツ解釈

それでは、ムニヤイによる解釈を整理しよう。ムニヤイは論文『ライブニッツの唯名論と神の心にある觀念の実在性(Leibniz's nominalism and the reality of the ideas in the mind of God)』において、ライブニッツについての唯名論的な解釈を彼独自の視点から検討する。

まずムニヤイは、唯名論的解釈に関し、一定の評価を与える。すなわち、ライブニッツにおいて、①ただ個体ないしモナドのみが実在者であり (GVI 607～609) ②個体の性質は個体の外部にある独立した存在者ではないとされ(GII 458)③抽象的な項辭を使用する際には注意が必要だとされ④關係は純粹に心的なステータスを有するとされているのであり、その点を唯名論的解釈は説明できているというのである⁴⁾。

しかし一方、ムニヤイは、メイツによって否定されたライブニッツにおけるアウグスティヌス的なイデア観⁵⁾にも、一定の評価を与える。周知のとおり、ライブニッツは神の意志によってイデア的なものないし事物の本質が恣意的に創造されたわけではないと考える。イデア的なものはあくまで神の知性の領域にあるものであり、そこにはさしあたって意志

は関わってこない。そして、さらに、神の知性ないし神の有する観念は、神の本質すらそこに含むようなものである⁽⁶⁾。もちろん、このことから直ちに、観念ないしイデア的なものが、神の存在に先立つものだとは結論づけることはできない。というのも、一方で、神によって保持されている観念は、神自身の存在を前提とするからである。神の本質と、神の現実存在は、神が必然的存在者であるがゆえに同時的である。同時的であるということは、神が現実存在するやいなや、神が知性において保持するようなイデア的なものの有り方は確定していて、変更不可能だということである。

ムニャイは、以上のような事情から、ライプニッツを唯名論者だとは言い切れないとする。それでは、ムニャイにとって、唯名論の本質とは何であろうか。無論、存在者とは個体的実体とその内的性質のみであると主張するような存在論であろう。ただ、彼は、真理の存在論的基礎とも言うべきものを、これに関連付けて考えるのである。つまり、ある認識とは、ある個体的実体によって保持される何らかの内的表象である。この場合、表象は個体にとって内的なものに留まるのであり、その外側の事物を把握する力を持たないのではないか。ムニャイは、唯名論にこうした危うさを見ているのである。

そして、ライプニッツの立場はコンセプショナリズム（概念論）と評される⁽⁷⁾。コンセプショナリズムとは、旧来アベラールの立場に冠せられた用語である。カレによれば、アベラールは客観的に実在する個体の本性の内に、普遍的概念のリアリティを基づけようとしている⁽⁸⁾。そして、普遍は声（vox）であるとする極端な唯名論を取るロスクリヌスと、实在論との中間的な立場をアベラールは取ろうとしていたとされるのである⁽⁹⁾。従って、普遍形成が恣意的であるかそうでないかが、ロスクリヌスとアベラールの議論の対立に基づいた、唯名論と概念論の対立枠組みであると考えられる⁽¹⁰⁾。

ムニャイの立場は、その後の出版された著書『ライプニッツの関係の理論(Leibniz's theory of relations)』でも大筋は変わらない。ムニャイはライプニッツの存在論を、基本的には唯名論的なものであり、関係を心に依存したものであるとする⁽¹¹⁾。そして、関係は、少なくとも二つのものが同時に考えられるときに観念されるものだというライプニッツの議論を、オッカムの考えに沿ったものだとする。

このようなオッカム的だとされる議論は、しかし、関係を知性が恣意的に創設することが出来るということ意味しない。知性は、実在する事物とその性質に基づいて、関係を形成し理解するのである⁽¹²⁾。

さらに、ライプニッツは、自分自身の立場を「nominalis per provisionem」と位置づける(Grua 547)。つまり、暫定的な意味で唯名論の立場を取るというのである。ムニャイは、ここから、ライプニッツが特定の立場に拘泥しているわけではないということが読み取れるとす

る⁽¹³⁾。それゆえ、ライプニッツにおいて實在論的な傾向が見られても、何ら不整合はないとされるのである。

以上がムニヤイの議論の概要である。それでは、この解釈に伴い、どのような事柄が問題となるのか。本論で、私は、個体概念の内実についてのムニヤイの考えに賛同する。個体概念は、關係的述語を含み、普遍的概念もまたこうした關係的述語との関わりのなかで定義されるのである。ところが、ムニヤイは、個体概念と個体的実体そのものの内容を区別する。その結果、神が認識する個体のあり方と、個体それ自体の性質との間にズレが生じることになる。この点は、ムニヤイの解釈の限界点であるように思われる。

2 個体概念と關係的述語

2. 1 關係的述語とは

ムニヤイの解釈の正当性を吟味する前にまず、個体概念に含まれるとされる關係的述語に触れておかねばならない。關係と關係的述語は、ヒンティッカと石黒氏によって、区別することが提案された⁽¹⁴⁾。確かに、ライプニッツは『クラーク宛書簡』で、長さLの線分と長さMの線分との比は、三通りに考えられると述べている。すなわち、LからみてMが M/L であるという述べ方、MからみてLが L/M であるという述べ方、さらに端的に両者の比が $L:M$ であるという述べ方があるのである（GVII 401）。そしてこの場合、前二者が、關係的述語を使用した記述であり、後者が關係であると考えられる。

さて、ライプニッツは、關係を「理性のつくったもの(entia rationis)」であるとも述べている(GII 188)。これをもとに、關係の存在論的身分は低く、存在の基本単位である個体はこれを全く含まないとも考えられたりした。だが、この場合、關係こそが「理性のつくったもの」なのであり、關係的述語は確たるものとして主体に内在しているとは考えられないだろうか。そうすると、私の主張するところの實在的關係を、關係的述語に対応するような個体における實在的性質として把握する可能性が残されているのではないか。そうした見通しのもと、ムニヤイによる關係的述語の扱いをみてゆきたい。

2. 2 實在的なものに基づいて概念が形成されるとはどういうことか

ムニヤイにとって、關係的述語は個体概念に含まれるものである。そして、個体概念は、全知なる神の知性によって完全な形で認識されている。従って、關係的述語とはまず、神が認識する關係的な概念であるということが出来る。

では、神による個体についての認識はいかなるものであると考えられるか。ライプニッツが神の知性の領域を、イデア的なものの存在する場所として認めていたことは周知の事

実であり、この点で神の知性の領域に関するムニヤイの指摘は正当であることを確認しておかねばならない。このことは唯名論的解釈をとる代表的論者であるメイツですら踏まえている。さらに神の知性は、全ての個体の認識を包含し、一個体の知性とは別格の扱いを受けていると考えられる。従って、この位置づけそれ自体は正当である。

それでは、実在する客観的事物に基づいて概念が把握されるとはどういうことか。客観的事物とは、もちろん、実在する具体的な個体的実体＝モノアドに他ならない。従って、概念はこれに即した格好で形成されなければならないことになる。

一方、もし真理が、すべて「神が知性によってこれこれの形で認識する」という命題に還元されたとしよう。そうすると、すべての真理を表す命題は、神を主語とし、認識の仕方を述語とする命題に還元されてしまう。述語の主体は、神しか必要ではないということになる。勿論、「オッカムの剃刀」の原理からすれば、述語の主体が複数ではなく単数である方が単純であるから望ましいわけであるが、被造物である個体にまったくコミットしないような命題に、真理を還元してよいのであろうか。というのも、述語の主体を唯一神のみであるとすると、普遍よりも個体を重視しようとする唯名論の存在論的意図を明らかに逸脱してしまうことになるからである。また、ムニヤイは、ある文が真理を表現しているとしても、その根拠はただ単に神がその文と同じようなことを考えるということにあるわけではないとする⁽⁴⁵⁾。仮にもし、真理が真理たりうるための要件がそれで足りるとするならば、神が永遠真理に反するような文を真にしてしまうということが想定できてしまう。となると、永遠真理が神をも拘束するということが説明しづらいように思えるのである。

さらに、周知のとおりライブニッツは神が意志によって必然的真理を改変することが出来ないと考えている(DM2)ことから、ムニヤイの指摘は説得力があると思われる。メイツなら、必然的真理が神の認識能力に還元されるが、そのあり方は不変であるとするだろう。しかし、そのように考えるならば、なぜ神の認識の仕方が不変であるのかについての説明が難しいのではないだろうか。伝統的にも、永遠真理の改変不可能性を主張していた哲学者たちはイデア的な対象を神の知性における内的対象であって確定したものであると考えていたわけであるから、単に認識能力に還元しようとする説は、そうした伝統を受け継ごうとしていたライブニッツ解釈としては強引であるように思われるのである。こうした事情を鑑みると、概念がモノアドの実在的なあり方に基づいて形成されることは間違いなところであろう。従って、ムニヤイの解釈はこの点に関しても支持出来る。

3 個体概念と個体的実体そのものの乖離の問題 □実在的關係をめぐって□

3. 1 ムニヤイ及びレッシヤーの解釈と共可能性の問題

以上は、ムニヤイの議論について、肯定的に評価できると思われる事柄であった。即ち、個体概念が關係的述語を含むこと、またそうした關係的述語と普遍が大いに関わっていることについては、私はムニヤイに賛同する。

一方、私が検討を要すると考えるのは、以下の論点である。ムニヤイにとって關係とは、複数の個体における内的性質に基づいて形成された概念であった。すると、關係それ自体は、個体の内的性質ではないのであろうか。この点について、ムニヤイは、個体概念と個体的実体そのものを区別する⁽¹⁶⁾。その上で、個体概念には他の個体との關係が含まれているが、個体的実体そのものはただ、純粋な意味で内的な性質を含むのみであるとする。

レッシャーもまた、これに類似する立場を取っている。彼は、關係の実在性を主張するが⁽¹⁷⁾、關係は二次的なものであるとも述べている⁽¹⁸⁾。つまり、個体の内的な性質から派生的に出てくる (arise from) ものであると考えられているのである。そのように考えた場合、もともとモノダが全く自己完結的であって、關係はそうした全く内的なものしか持たないようなモノダを、事後的に比較対照することによって成立するものでしかないように思える。その上で、無限数の述語によって、個体的実体そのものが汎通的に規定されうと考えている⁽¹⁹⁾。そうすると、關係的なものは述語に入ってくるものであって、個体的実体そのものの内には入ってこないと考えられるのではないかとも思える。

しかし、このように考えるのであれば、共可能性の問題をうまく説明できないのではないだろうか。即ち、もし、關係的述語が、個体概念に含まれるものではあれ、個体的実体そのものの内には含まれるものでないのであれば、相互に矛盾するような二つの個体は絶対的には両立不可能ではないようにも思われるのである。つまり、神が複数の個体を互いに關係づけた上で認識した結果として形成されるのが個体概念なのであれば、仮に神が個体同士を關係づけて認識しなければ、一つの個体を孤立的に創造することも可能ではなかったのかという疑問が起こってくるのである。個体的実体そのものにおける実在的性質として、他の個体と関わるものがないのであれば、ある個体 A と B が両立可能であり、A と C は不可能であるといった事柄がいかんして生じるか理解し難いのではないだろうか。それは例えば、ポンペイウスに勝利するカエサルとカエサルに敗れるポンペイウスは両立可能であるが、ポンペイウスに勝利するカエサルとカエサルに勝利するポンペイウスは両立不可能であるといったことである。

実際、ライブニッツの考えるところでは、神はただ一つの個体をのみ創造することも、互いに不整合な個体を創造することも出来なかったはずなのである。つまり、個体同士の一致対応關係は現実世界のみならずすべての可能世界において妥当するような必然性を有している。というのも、ライブニッツは、所謂『24の命題』において、共可能性が全て

の可能的世界において保持されていなくてはならないものであるとしているからである⁽²⁰⁾。すると、個体が他の個体との関係を実在的なものとしては含まないとする解釈は、ライブニッツの真意に沿うものと言えるのであろうか。

私見では、共可能性の問題は、論理的な問題に留まるものではない。ムニャイやレッシャーの議論に従えば、モナドの内的性質そのものは、なんら他のモナドの性質と衝突するものではない。ただ、あるモナドと、他のモナドとは、それらを両立させたのであれば論理的に不整合を引き起こす可能性がある。そして、論理的に矛盾するような事柄は神でさえない。そうしたことから、神は、互いに整合的な存在者が共存するような世界を創らざるをえない。

このような主張は、しかし、「論理的な問題」がライブニッツにとって存在そのものの問題と直結していたことを見過ごしたものではないだろうか。つまり、論理的な矛盾ないし不整合は、存在者相互の衝突関係に相当するのではないかと思われるのである。

省みると、ライブニッツは、可能的な事物においてでさえ、一種の「力の拮抗関係」がみられると考えている。そこにおける「力の均衡」は、現実存在する事物相互におけるそれとは明らかにレベルを異にするのであるが、それでも力の強いものが弱いものを自らへと適合させるような関係がそこでは成立しているのである。

例えば『モナドロジー』をみてみよう。神は、二つの単純実体＝モナドを比較した上で、それぞれの内に一方を他方に適合させざるを得ないような理由を見出すとされる(M 5 2)。ここで、「適合させる」とはどういうことであろうか。もともと確定してしまっている個体の本質を、恣意的に改変することではない。そのようなことは、ある個体が当該個体であることを損なうようなものであり、論理矛盾を招く。そうした事柄は、神でさえなすこと能わざるものなのである(DM2)。従って、「適合させる」ということは、神が恣意的に力を加えるような働きではない。そして、個体概念は、その個体と他の個体との関係をも述語として含んでいると考えられる。そうすると、完全な個体概念は、既に他の個体と一致対応しているものであり、それを強いて「適合」させなくとも、個体同士的一致対応関係（予定調和）は成し遂げられるのである。

それでは、「適合させる」ことはなぜ必要であるのか。また、どのようにしてなされるのであるか。私見では、「適合させる」こととは、神が個体の本質を、その本質のままに生成・確立せしめるような際になされるような働きである。それは神が意志によって恣意的に介入するのではなく、ただ本質が本質のままに成り行くのをいわば見守るような段階であるといつてよい。個体は、創造される以前にすでに、その本質を汎通的に規定されたものとして有している。そしてそれは神の知性とともにあるものであり、時間を超えた永遠的な

ものである。ただ、個体の本質が確立する過程を、時間的にではないにせよ論理的な意味でたどりなめすることは出来るのではないだろうか。

それでは、個体の本質はいかにして確立されるのか。思うに、個体はそれぞれ、固有の視点(DM14)ないし立脚点というものがある。そして、固有の力の強さ(DM15)がある。そして、自分の立場に立って自己主張し、力を及ぼそうとする。なぜなら個体は全能者たる神を最大限に模倣しようとするからである(DM 9, M48)。自分と他の存在者の力関係の結果として、自己の力の範囲が確定する。それが結局、個体に汎通的規定をもたらすことになる。そうすると、神が「個体を適合させる理由」とは、個体の立脚点と、その力の強さではないだろうか。個体は、自分に「近い」(cf.DM33)、力の強い他の個体の影響を最も受ける。そして、その上で自己のあり方が形成されるのである。

以上を考慮すると、神の知性の領域において、可能的諸事物の本質が、相互に「力を及ぼし合い」ながらそのあり方を確定してゆくといったことが起こっているのではないだろうか。実際、ライプニッツは、モナドの単純性と多様性が両立することのアナロジーとして、点は単純だがそこに集まる線によって形成される角は無数見出されると述べている(PNG2)。だとすれば、モナドの視点がもともと単純極まるものであり、その性質の多様性は他のものとの関係から派生してくると考える余地があることになる。

そして、個体の本質がそのようにして確立されたものであれば、実際に存立するモナドの「内的」性質にも、明らかに「他の存在者から及ぼされた力の刻印」ともいうべきものが見出されるのではないだろうか。

周知のとおり、ライプニッツの存在論は、力の形而上学とも言うべきものである。なぜモナドの根本原理が力と呼ばれるかという、一つには、自発的な自己展開の能力(DM32)ということが含意されている。力のもう一つの契機は、「力の及ぼし合い」(M49)にある。モナドは、全体としては、自己完結した存在者としてある。モナドの根本原理は、原始的力とされ、これがさまざまな様態を自ら産出するとされる。ただ、この原始的力も、その存立の段階で同一世界に属するさまざまな存在者との関係を持ちながら生成するものである。つまり、ある個体の本質は、その個体固有の力に基づいて、自分自身の固有の「位置」から他の個体へと力を及ぼそうとする格好で成立している。そうした力の拮抗関係は、個体の本質を形成する根本契機である。こうした拮抗関係によって一つの個体の性質が生みだされるとすれば、ある個体における変化が他の個体の内容に必然的に反映されるとしても納得がいく。

これに対して、ムニャイは、ライプニッツが考えた、「万物同気」(M61)などという言葉に集約されるすべての存在者の共振関係を、独断的な主張だとする⁽²¹⁾。そして、ライプニ

ッツにおける「純粹に外的な規定は存在しない」(NE 2.25.5)という主張にも疑問をさしはさむ。ムニヤイは、ハエ一匹の存在によって、個体の外的な規定が変化することについては納得している。ハエが新たに生まれてくれば、他の個体とそのハエとの関係が新たに考え得るからである。ただ、ハエの誕生が、そこから遠く離れた存在者に現実に影響を及ぼし、これを変化させることについては疑問を投げかけているのである。しかし、ライブニッツは論理的問題のみをここで考えているのではない。実際、宇宙が空隙のない連続体なのであれば(M61)、一つの個所で起こった運動が波動として全体に(極めて微かな形であれ)波及していくことは理論的に成り立つように思える。

以上から、私は個体概念と個体的実体の内容を分離して考える解釈に反対する。

3. 2 プレストッドの解釈

補足的ながら、個体概念と個体的実体そのものの乖離に関連した興味深い解釈を紹介しておこう。プレステッドは、ごく最近に出版された著書『ライブニッツの純粹外的関係論(Leibniz on purely extrinsic denominations)』で、ムニヤイの解釈に対する疑問を提示する⁽²²⁾。ムニヤイは、個体概念と個体的実体そのものを切り離して考えるから、個体概念における関係の述語の変化が個体的実体そのものの内的性質の変化を帰結させるわけではない⁽²³⁾。一方、プレステッドは、ライブニッツの形而上学における大原理である「相互連関(interconnection)」の原理によって、ある個体における内的変化は孤立的に起こるのではなく、必ずそれに対応するような他のすべての個体における内的変化を伴うとしている。従って、ある個体の内的変化は、その個体の外的規定を変化させ、また他のすべての個体の内的規定をも変化させるということになる。

そして、プレステッドは、個体概念とそれが含むものについて独自の解釈をする。彼によれば、個体Aの概念は、同一宇宙に属する他の個体Bの概念を全く包含(include)してしまうわけではない。もし全く包含してしまうとすれば、BはAに含まれ、AはBに含まれ、しかもAとBは同一ではないという極めてパラドシカルな事態が生じてしまうからである。ところが、Aの概念におけるBとの関係を示す述語は、Bを含まないが要求するのである。そして、この場合における、Bを含まないが必要とする(need)ということが、とりもおさずAによるBについての「表現」だとされるのである⁽²⁴⁾。

プレステッドは、個体概念が他の個体との関係を述語として含むということと、ある個体が他の個体を一方的に包含するわけではないということとを、うまく整合的に説明しようとしていると思われる。ただ、プレステッドにしても、個体概念を主語とする命題に関する論理的問題をもっぱら扱っているという観は否めない。Aが含む、Bを表現するような

關係的述語が指し示す、A における実在的性質とはなにか、という問題は、そこでは正面切っては扱われていないと思われるのである。

私の解釈では、プレステッドが主張するところの「A が有する B を表現するような關係的述語」とは、次のような A の実在的性質を指し示すようなものである。A の自己同一性は、その固有の力の強さと立脚点に従って、同一宇宙の他の存在者との拮抗關係の中で確立される。そして、この局面において、A の内容には、B との力の拮抗關係が不可避免的に刻印される。A が強力であれば、B を自らに適合させることになる。逆に B が強力であれば、A がそれに引きずられて内容を決定されることになる。ともあれ、こうしてできた A の内容が、A が含む B を表現するような内容であるということになる。

4 人間が有する觀念の問題

さて、個体概念と個体的実体そのものの乖離の問題は、個体についての存在論に留まるものではない。それは、我々人間が有する認識の存在論的基礎に関わる問題である。そのことを最後に示したいと思う。

ムニャイは、神の觀念と人間が有する觀念をはっきりと区別する。その上で、人間が有する觀念は、神が有する完全な觀念の記号的表現であるとするのである。そうしたことから、ムニャイは、真理は記号を通じて認識されるが、人間が恣意的に設定した記号に依存はしない旨を表明したライブニッツの著作『対話(dialogus)(GVII 190～194)』を、「人間の心」における真理を専ら扱ったものと解釈する。「人間の心」における真理と対立するのは、「神の心における (in mente Dei)」真理である。人間にとって、真理ないし普遍的觀念は、記号やシンボルを通してしか認識されえない。それに対して、神は、そうしたものを直接に認識するのである。ムニャイは、普遍が言葉であり事物(res)ではないということと、真理が言葉に依存したものではないということが、ライブニッツにおいて両立していると見る。そして、後者を説明したのが『対話』だということになる。ムニャイによれば、『対話』では、名辞そのものに真理があるのではなく、名辞相互の關係が織り成すネットワークにこそ普遍的な真理があるという議論が展開されているのである。名辞それ自身は、人間が恣意的に導入するものである。それでも、それを使いこなす際には、名辞相互の關係は普遍的な真理をある程度反映したものにならざるを得ないとされるのである。こうした記号觀が、「神を模倣する者」という人間觀と対応していると考えられる。

それでは、いかにして人間は、神の觀念を「表現」出来るのであろうか。

ムニャイは、人間が心のうちにもつ表象そのものは、他のものの關係を含んでいないとの立場を取るようである。私は、この点が、觀念の認識論的資格を危うくすると考える。

ムニヤイによれば、個体概念は、他の個体との関係を孕んでいて、神は一つの個体を他の個体と関係づけながら認識する。そして、人間が心の内に持つ観念が、世界における他の存在者に対応しているのは、神が個体を他の個体と関係づけた上で認識していて、一致対応関係が予定調和的に成立するからに他ならない。

しかし、そのような形で個体概念と個体存在が分離されることの根拠は何か。個体概念が、個体が何であるかを指し示すものであれば、個体的実体が純粋に内的な性質のみを含むのであれば個体概念もそのみを表現すれば十分であるはずである。従って、個体概念になぜ関係の述語が含まれる必要があるのかという疑問が起ってこざるをえない。それに伴って、個体の一致対応関係の必然性や、存在論的根拠も希薄になってくるように思えるのである。そして、普遍的観念というものが、個体同士の関係として認識されるものであれば、こうした関係を認識するための存在論的根拠が希薄である存在者が、どのようにして普遍的観念を認識するのかも説明し難いのである。

これに対し、個体的実体の実在的内容に、他の個体の刻印が不可避免的に入り込んでくるとすればどうであろうか。先述のように、観念が、たとえそれが神の観念であっても、具体的な個体に即して形成されたのであれば、様々な個体について認識している（否、せざるをえない）存在者は、普遍的観念を形成する要件をさしあたり満たしていると言える。そして、個体が、その存立の際に両立可能な他のすべての個体との関係を孕み、それらを反映し表現するものとして生まれたのであれば、個体＝モノダはそうした要件を満たす。

人間による認識が神の認識の似姿たりうるのは、人間の表象が宇宙およびそこにおける様々な法則と不可分の形で結び付けられているからである。このような人間による認識を、人間精神による諸事物の「表現」と呼ぶのである。モノダは、宇宙を映しだす生きた鏡であり、人間もその例にもれないのである。

では、そうした「表現」はいかにしてなされているのか。それはまた、人間が表象の中で有する「観念」がどういったものかという、優れて近世的な問題へとつながってゆく問いかけである。

註

- (1) Russell, A critical exposition of Leibniz's philosophy, 1900 section 10 etc
- (2) 石黒ひで『ライプニッツの哲学』岩波書店 1984, p.146 etc
- (3) 拙稿『モナドロジーの二つのアスペクト』『哲学論叢』第29号 収録) p10 参照
- (4) Mugnai, "Leibniz's Nominalism and the Reality of Ideas in the Mind of God" in : Mathesis rationis. Festschrift f.H. Schapers. ed Heinekamp. A., Lenzen. W., Schneider. M., Münster. 1990 p165
- (5) アウグスティヌスの立場、ないしアウグスティヌス主義とは、メイツにおいてはイデアの対象を實在

として認める立場と端的に理解されていたようだ。対しムニャイは、いわゆるプラトニズムと、アウグスティヌスの立場を区別している。その観点からすればアウグスティヌスは、普遍的観念を認めつつ、それを神という究極の実体に従属するものとして考えることによって、難点の回避を図ったと言えることが出来る。

(6) Mugnai, *ibid.* p164

(7) Mugnai, *ibid.* p166

(8) Carré, *Realists and Nominalists*, Oxford university press, 1946, p46

(9) もっとも、カレは、早くも概念論というレッテルをアベラールに貼ることに反対を表明している。

Carré, *ibid.* p62 近年の研究者も、アベラールを概念論ではなく唯名論者として位置づけている。清水哲郎『オッカムの言語哲学』p110 Alain de Libera, *La philosophie médiévale*, 2e éd., Presses universitaires de France, 1995, c1993.

(10) なお、オッカムの唯名論と、概念論との対立枠組みは、これとは全く様相を異にする。オッカムの唯名論も、概念論（これは結局のところ改変されたアベラールの議論ということになるのだが）も、ともに外的事物たる個体に基づいた認識を人間がいわゆる「普遍」を介してなしているということについては同意する。ただ、概念論は、記号が概念を表現し、概念が個物を指示するという考えを取るのに対して、オッカムの唯名論は記号（言葉）が直接に個物を指示するような考えを取るのである。Carré, *ibid.* p110-112

(11) Mugnai, *Leibniz's theory of relations*, Franz Steiner Verlag, Stuttgart 1992, p.17

(12) Mugnai, *ibid.* p18

(13) Mugnai, *ibid.* p22

(14) Hintikka, *Leibniz on Plenitude, Relations and the 'Reign of Law'*, *Leibniz: A Collection of Critical Essays*, Anchor Books, New York. p160 Ishiguro, *Leibniz's Theory of the Ideality of Relations*, *ibid.* p208

(15) Mugnai, *ibid.* p20

(16) Mugnai, *ibid.* p130

(17) Rescher, *Leibniz's metaphysics of nature*, 1981 Reidel p76

(18) Rescher, *ibid.* p74

(19) Rescher, *Leibniz An introduction to his philosophy*, 1979 Basil Blackwell, Reprinted in 1993 by Gregg Revivals, p52

(20) 拙稿『モナドロロジーの二つのアスペクト』『哲学論叢』第29号 収録) p9-10 参照、

(21) Mugnai, *ibid.* p131

(22) Dennis Plaisted, *Leibniz on purely extrinsic denominations*, University of Rochester Press, 2002 p105

(23) Plaisted, *ibid.* p102

(24) Plaisted, *ibid.* p97

略号

ライプニッツからの引用は以下の略号による。

G: Gerhardt(ed.) *Die Philosophischen Schriften*

GM: Gerhardt(ed.) *Mathematische Schriften*

Grua: *Textes inédits*, Ed. Gaston Grua.

C: Couturat(ed.) *Opuscules et fragments inédits*

NE: *Nouveaux essais sur l'entendement humain*

M: *Monadologie*

DM: *Discours de Métaphysique*

PNG: *Principe de la Nature et la Grâce*

T: *Theodicée*

S: *Système nouveau*

Relational predicates and real relations

—Concerning the individual and individual notion in the philosophy of Leibniz—

Shohei EDAMURA

The notion of relational predicate, which was distinguished from relation itself in the philosophy of Leibniz, was first introduced in the interpretation of Leibniz's philosophy by J. Hintikka and H. Ishiguro. However, they argued it mainly from a logical point of view. Through a close study of Leibniz's metaphysics, this paper aims to make clear and evaluate the essential points of the interpretation of M. Mugnai, who recently regarded the relational predicate as an important element in Leibniz's philosophy, to sort out the points that can be agreed upon from those that cannot. In my view, Mugnai's interpretation is appropriate in that it emphasizes that the relational predicates of an individual notion must be based on the inner properties of the individual. But on the other hand, he distinguishes between the individual notion and the individual substance, attributing the relational predicates to the individual notion, not to the individual substance, which does not include anything relational. In view of Leibniz's ontology, this way of thinking is one-dimensional. The properties of an individual substance are formed through the relationships with other individual substances in the same universe and relational predicates express such relations, i.e. real relations.